

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 11 日現在

機関番号：34311

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25380859

研究課題名(和文) 葛藤処理方略における文化的自己観構築のメカニズム：文化は子どもにどう伝達されるか

研究課題名(英文) International Comparison of Mechanism of Formation on Conflict Resolution Strategy: How is culture handed over to the children?

研究代表者

塘 利枝子 (Tomo, Rieko)

同志社女子大学・現代社会学部・教授

研究者番号：00300335

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、人々の葛藤処理方略スキーマの次世代伝達や個人内変容について、東アジア諸国・地域(日本、中国、台湾、韓国)の国語教科書に描かれた葛藤処理方略に関する今までの研究知見をさらに発展させて研究を行った。第1に、4ヶ国・地域の大学生、保育者、小学校教師を対象にした質問紙調査の結果、東アジア内でも葛藤処理方略は同一ではなかった。第2に、教師の授業内での行動の中に文化伝達が行われている仕組みが存在していた。第3に、文化間移動者を取り巻く国際・外交関係が、個人の葛藤処理スキーマの変容に影響をしていた。以上の研究成果は、各国の実際の国際紛争解決や外交に活かしたり、相互理解教育に活用できるであろう。

研究成果の概要(英文)： The purpose of this study is to examine schema and personal change of conflict resolution strategy in East Asian countries and areas (Japan, China, Korea and Taiwan).

The results were as follows: 1) The conflict resolution strategies of university students and teachers were various among neighboring regions in East Asia. 2) The Teachers behave in classes to make their children put on some sense of values. 3) International and diplomatic relations influenced change of conflict resolution strategy in the cross-culture transition persons. These results were utilized for actual international dispute solution and diplomacy of each country, and we will need to convey to children strategies that foresee the coming global society.

研究分野：発達心理学

キーワード：文化比較 教科書 葛藤処理方略 東アジア 文化的自己

1. 研究開始当初の背景

(1) 東アジア諸国・地域間の国家間衝突

近年東アジア諸国・地域間では領土等の問題を巡って様々な国家間衝突が見られる。各国・地域それぞれに自国の正当性を主張しており、各国・地域間で納得のいく解決策をなかなか出せない。それらの理由の一つとして、学校教育において異なる歴史観が大人から子どもへと教えられていることがあげられる。しかし東アジア諸国・地域の衝突問題解決をさらに困難にしているのは、このような事実の認識の違いだけではなく、どのように解決したら望ましいかという解決の仕方や、解決に至るまでの道筋が隣国であっても異なる点である。

(2) 教科書に描かれた東アジアの葛藤処理方略

文化的自己観や葛藤処理方略は、東アジア諸国・地域内でも異なる。塘(2001;2005)は、各国各時代の大人たちが良しとする価値観を内包している小学校国語教科書を材料にして、小学校国語教科書に反映された子ども観や発達観を研究してきた。紛争解決の基盤となる葛藤処理方略の違いについても、東アジア4ヶ国・地域(日本、中国、韓国、台湾)の教科書を対象に内容分析を行ってきた(塘,2011)。

その結果、日本では「無邪気な信頼性による葛藤処理方略」が特徴的に見られた。これは、敵対する他者であっても相手の良いところを見つけ、自分が相手を無邪気に信頼していれば、きっといつか相手は敵対心を捨て、相互協力関係を結ぶことができるという信念に基づいており、できるだけ相手との葛藤を避けようとする方略である。一方、中国では「直接的な葛藤処理方略」が特徴的に見られた。これは、敵対する相手に対しては、たとえ相手が反省を示しても徹底的に最後まで攻撃することによって解決をはかるという方略である。このように価値観を教授することを第一の目的としない国語教科書においても、葛藤処理方

略に関する価値観の違いが国家・地域間で見られた。

2. 研究の目的

教科書に反映された文化内に共有された価値観はどのように構築され、さらに次世代に伝達されていくのだろうか。本研究では、塘が今まで行ってきた教科書に反映された社会内で共有化された「文化的な知」の文化比較研究を発展させ、以下の3点を主たる目的とした。

① 次世代の育成に影響を与える教師や保育者の葛藤処理方略におけるスキーマの比較

葛藤処理方略における文化的自己観を子どもたちが構築するうえで、小学校教師や保育機関の保育者は重要な役割を果たす。彼らは小学校教科書に描かれた葛藤処理行動をどう評価し、実際に行動しようとしているのか。東アジア4ヶ国・地域の教師・保育者や大学生の葛藤処理方略におけるスキーマの比較分析を行う。

② マイクロシステムにおける文化伝達の微視発生的過程

学校や保育機関において、葛藤処理方略に関する社会内の共有知は、教師や保育者から子どもにどのように伝達されるのか。伝達過程について、小学校における国語や道徳の授業分析や、子ども同士のいざこざに対する保育者の処理方法の分析を通して、文化伝達の微視発生的過程を明らかにする。

③ 文化間移動による葛藤処理方略の個人内変容

個人がある文化内で成長し、その文化内での価値観を身に付けたのちに、留学や結婚等によって文化間移動をすることにより、移動先の文化内で個人に期待される葛藤処理に関する価値観をどう取り入れ、今まで身に付けてきた価値観との間でどうすり合わせをしていくのだろうか。葛藤処理行動の再構築過程について、母国と在住国との

関係をも考慮しながら比較分析をする。

3. 研究の方法

① 東アジア4ヶ国・地域の青年期・成人期を対象とした質問紙調査

小学校国語教科書に描かれた葛藤処理方略の特徴を踏まえた質問紙を作成した。小学校教科書に描かれた特徴的な葛藤処理方略に関する作品を日本と中国から選び、その作品内の弱者と強者の登場人物に対する評価と、実際自分がそれぞれの登場人物だったらどうするかといった実際の行動について、小学校教師や保育者、そして教師や保育者をめざす大学生を対象に回答を求めた。

② 小学校や保育機関におけるフィールドワーク

日本の関西A小学校と台湾の台北市B小学校における国語や道徳の授業過程を分析し、教師がどのように子どもたちに価値観を伝達していくかといった価値観伝達に関する微視発生的過程の比較分析を行った。また日本の関西C保育所と中国の北京D幼稚園での子どものいざこざへの保育者の対応を比較分析した。

③ 在日外国人と在外日本人への面接調査

在日外国人と在外日本人を対象に面接調査を行い、母国で身に付けてきた葛藤処理方略が、留学や国際結婚等の文化間移動によって、どのように変容したかという変容過程について分析することで、個人の文化的自己観の再構築過程を描き出した。

4. 研究成果

(1) 教師・保育者、大学生の葛藤処理方略におけるスキーマの比較

第1に登場人物の弱者に関しては、以下の3点の結果が得られた。(a)日本では「無邪気」に接することにより相手との葛藤を回避する行動を高く評価するものの、いざ自分が行動するとなると、強者への恐怖心があり、高く評価した「無邪気性」を行動に移すことが

できず、評価と行動が一致しない傾向が見られた。(b)中国では弱者と強者とがはっきりと区別されており、その時の状況よりも弱者、強者のもとと持っている個人の特性で判断する傾向があった。(c)台湾と韓国では、時には日本と同じ、時には中国と同じ傾向といったように、葛藤解決方略を使い分けていた。

第2に、強者に関しては2点の結果が得られた。(a)日本では強者の「自己犠牲」を高く評価する傾向が見られたが、いざ自分が行動するとなると躊躇する傾向があった。(b)台湾や韓国では、弱者の評価や行動と同様の「使い分け」傾向が見られたが、その中でも韓国では「正直性」「誠実さ」を重視していた。

以上の葛藤処理方略行動に対する評価と、自分の実際の行動に関する結果とを考え併せると、日本では特に評価と行動との乖離が大きく、子どもたちは純粹で自己犠牲的な行動を良いものとする葛藤解決スキーマを伝達される一方で、現実的な解決も「隠れたカリキュラム」として教師から提示されている可能性がある。今後のグローバル社会の中で、このような葛藤処理方略のスキーマに関する日本の教師のダブルバインド的な価値観伝達については再考する必要があるだろう。

第3に、大学生に対する分析結果では、教師や保育者の結果と一部異なる傾向が見られたが、ほとんどの項目において、国・地域内の回答傾向は同じであった。また性差に関しては特に日本において有意な性差が見られ、日本の女性は男性に比べて無邪気さや優しさを有意に高く評価する傾向があった。

以上の結果は、国家間の葛藤解決処理と対応しており、文化歴史的な状況の中で培われた対処法が次世代にも伝達されていくと考えられる。

(2) マイクロシステムにおける文化伝達の微視発生的過程

第1に、小学校の国語と道徳の授業内で行われる教師と子どもとのやりとりに関する

発話を日本と台湾の小学校内で分析した。その結果、教師が意図していた答えや教師の価値観に合った子どもの発言への強化の仕方は日台で共通であったが、教師の意図していた答えや価値観に合わない子どもの発言に対しては異なる傾向が見られた。日本では回避行動をとったり、間違いをはっきり示さないことが多く、台湾では直接的に間違いを指摘することが多かった。子どもの想定外の発言や間違った発言を葛藤ととらえた場合、日台とでは、授業内での教師の葛藤処理の仕方が異なり、それらが次世代にも伝達されていると考えられる。

第2に、保育施設における子どものいざごぎへの保育者の対応について日本と中国の比較分析を行った。その結果、保育者がすぐには介入せず、まずは子どもたち自身が解決できるよう見守ったり、他者の気持ちに配慮しながら解決する傾向が見られた。一方、中国では保育者がすぐに子どもたちのいざごぎに介入して解決し、解決を子どもたちに任せない傾向があった。中国ではいざごぎは権威者が解決するもので、解決結果には特に理由を求めない傾向が日本より強いと推測される。以上のような保育者の葛藤処理の違いは、幼児期の子どもたちにも保育者の行動を通して伝達されていると推測される。

(3) 文化間移動による葛藤処理方略の個人内変化

在日外国人の女性と在外日本人女性に面接調査を行った結果は以下の2点である。第1に、自分の母国と現在の在住国との外交関係や母国に対する在住国内での好意度が、身近な人との対人関係や葛藤処理方略に影響を及ぼしていた。韓国と台湾に在住している日本人女性の葛藤処理方略を比較すると、家族内では母国と在住国との間の国際紛争の話題を、台湾に在住している女性よりも避ける傾向が見られた。

第2に、海外で青年期まで教育を受けて、

現在日本に長期在住をしている女性に関しても、自分の母国と日本との外交関係が、身近な人との葛藤処理方略に影響を及ぼしていると答えていた。この点は海外在住の日本人女性と同様であった。しかし、日本では明確な表現を避けてコンテキスト（状況）から互いに相手の意図を読み取る対人行動が多くみられるハイコンテキスト社会である。そのため、日本人の友人や仕事仲間、家族内での葛藤処理の際には葛藤処理の背後にあるスキーマの読み取りが不明瞭で、その曖昧性によりどのような葛藤処理行動を周囲から期待されているかが分からず、海外の日本人女性よりも苦勞している傾向が見られた。

また日本での滞在が長期になるにつれて、母国での家族や友人との間の葛藤処理方略に違和感を持つとともに、他者の気持ちにより配慮しながら葛藤処理を解決するようになったと答える傾向がみられた。

以上のように、国家間の関係や母国の国際社会での位置といったマクロシステムが、文化間移動をした個人の家族や職場、友人関係などのマイクロシステムの場に影響を与えていることが明らかになった。

本研究では以上3つの視点と方法により、葛藤処理方略における文化的自己観の背景にある文化的な価値観と、それらの価値観を個人がどう取り入れて再構築していくかに焦点をあてて児童期から成人期までを対象に分析を行った。本研究の結果から、個人の葛藤処理方略は、国際情勢や国家間の葛藤の影響を受けていることが明らかになった。同時に、同じ東アジア諸国・地域の中でも葛藤処理方略は異なり、次世代にも同様の葛藤処理方略が教師や保育者を通して伝達されていくことが明らかになった。現在でも東アジア諸国・地域内での紛争は絶えないが、外交問題においても各国が抱えている葛藤解決スキーマを考慮したうえで

行うことが、外交問題のよりよい解決につながるるとともに、次世代の国際理解教育にも活用できると示唆された。

今後は東アジア諸国・地域だけではなく欧米をも想定に入れたうえで、東アジアの特殊性を明らかにするとともに、葛藤処理方略に関する国家・社会間の違いが、家族や職場における個人の葛藤処理行動や葛藤解決スキーマをどう変容させていくかについて分析を進める予定である。

文献

塘 利枝子・木村 敦.(2001). 小学校教科書に反映された子どもに期待される対人的対人関係：「東洋」対「西洋」の対比は妥当か 平安女学院大学研究年報 1, 95-109.

塘 利枝子編著.(2005). アジアの教科書に見る子ども ナカニシヤ出版

塘 利枝子.(2011). 東アジアの教科書に描かれた自己表出 榎本博明編著『自己心理学の最先端: 自己の構造と機能を科学する』241-254.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3件)

- ① 塘 利枝子・翁 麗芳・玄正煥・金 娟鏡、日本・中国・台湾・韓国の保育者・教師が抱く葛藤解決方略、同志社女子大学『現代社会フォーラム』、12号、14-32、(2016)、査読有
- ② 塘 利枝子、文化が子どもの発達を創る：教科書と保育者に見る「いい子」像、『子ども』学 17号、133-161、(2015)、査読無
- ③ 塘 利枝子、第二次大戦後の日本の教科書に描かれた家族成員間葛藤の変容、同志社女子大学『現代社会フォーラム』、9号、39-50、(2013)、査読有

〔学会発表〕(計 18件)

- ① 塘 利枝子、東アジアと欧州の教科書にみる親子間葛藤：日本・中国・ドイツ・イタ

リアの親子間葛藤に焦点をあてて、日本教育心理学会第 59 回大会、2017 年 10 月 7 日～9 日、名古屋国際会議場 (愛知)

- ② Tomo,R.、Cultural Comparison of Solution Styles displayed in Japanese, German and Italian School Texts: Are the solution styles same in the EU?、15th European Congress of Psychology、2017 年 7 月 11 日～14 日、アムステルダム国際会議場 (オランダ)
- ③ 塘 利枝子・翁麗芳・玄正煥、日本・韓国・中国・台湾の保育・教育者の葛藤処理方略 2：「強者」の行動に焦点をあてて、日本保育学会第 70 回大会、2017 年 5 月 21 日、川崎医療福祉大学 (岡山)
- ④ 塘 利枝子・玄正煥、日本・韓国・中国・台湾の女子大学生の葛藤処理方略：評価と実際の行動のずれに焦点をあてて、日本発達心理学会第 28 回大会、2017 年 3 月 27 日、広島国際会議場 (広島)
- ⑤ 塘 利枝子、日本・中国・台湾の教師・保育者は親子間のやりとりをどう評価しているか、第 13 回日本こども学術会議、2016 年 10 月 8～9 日、静岡大学 (静岡)
- ⑥ Tomo,R.、Cultural Comparison of Conflict Solution Style of Pre-School Teachers in Japan, China, Taiwan and Korea、31th International Congress of Psychology、2016 年 7 月 27 日、PACIFICO YOKOHAMA (神奈川)
- ⑦ 塘 利枝子・翁麗芳・玄正煥、日本・韓国・中国・台湾の保育・教育者の葛藤処理方略：「弱者」の行動に焦点をあてて、日本保育学会第 69 回大会、2016 年 5 月 8 日、東京学芸大学(東京)
- ⑧ 塘 利枝子・金娟鏡・玄正煥、日本・韓国・中国・台湾の大学生の葛藤処理方略、日本発達心理学会第 27 回大会、2016 年 4 月 29 日、北海道大学 (北海道)
- ⑨ 塘 利枝子、東アジアの教科書にみる親子間葛藤の変化 1：日本・韓国・中国・台湾の 1950～2010 年の拒否行動に着目

- して、日本教育心理学会第 57 回総会、2015 年 9 月 27 日、朱鷺メッセ（新潟）
- ⑩ Tomo,R.、Cultural-Historical Comparison of Solution Style displayed in Japanese, Korean, British and German School texts from 1960 and 2010、14th European Congress of Psychology、Universita degli Studi di Miano-Bicocca（イタリア）
- ⑪ 塘 利枝子・玄正煥・金娟鏡、日本と韓国の大学生の葛藤処理方略と自己像：教科書に描かれた葛藤処理方略に対する日本と韓国の大学生の評価、日本発達心理学会 26 回大会、2015 年 3 月 20 日、東京大学（東京）
- ⑫ 沼田潤・塘 利枝子、英独仏の国語教科書に描かれた親子間の葛藤処理方略、日本教育心理学会第 56 回総会、2014 年 11 月 7 日、神戸国際会議場（兵庫）
- ⑬ 沼田潤・塘 利枝子、日英の国語教科書に描かれた親子間の葛藤処理方略、日本心理学会第 78 回大会、2014 年 9 月 10 日、同志社大学（京都）
- ⑭ 塘 利枝子・翁麗芳、日本と台湾の保育についての相互イメージ 2：保育の長所・仕事観との関係、日本保育学会第 67 回大会、2014 年 5 月 18 日、大阪総合保育大学・大阪城南女子短期大学（大阪）
- ⑮ Tomo,R.、Cultural-Historical Comparison of Solution Style displayed in East Asian School texts from 1950 to 2010、International Congress of Applied Psychology、2014 年 7 月 12 日、Palais des Congrès（フランス）
- ⑯ 塘 利枝子・金娟鏡、日韓の教科書にみる父親像と母親像の変化、日本発達心理学会 25 回大会、2014 年 3 月 1 日、京都大学（京都）
- ⑰ Tomo,R.、Cultural Comparison of Solution Style displayed in East Asian and European School texts、13th European Congress of Psychology、2013 年 7 月 12 日、

Stockholmsmässan（スウェーデン）

- ⑱ 塘 利枝子、東アジアの教師が伝える親子間葛藤処理方略、日本発達心理学会第 24 回大会、2013 年 3 月 15 日、明治学院大学（東京）
- 〔図書〕（計 4 件）
- ① 塘 利枝子、異文化間における心の支援、山本雅代・馬淵仁・塘 利枝子編著『異文化間教育のとらえなおし』、明石書店(2017)、総ページ数 223 頁、分担執筆 111-128 頁。
- ② 塘 利枝子、児童期の発達：自己概念と社会性、向田久美子編著『新訂発達心理学概論』、放送大学、(2017)、総ページ数 244 頁、分担部分 129-144 頁。
- ③ 塘 利枝子・川口陽子、フランスの小学校教科書に描かれた子ども：日仏の親子間葛藤を比較して、長谷川富子・伊川徹・饗庭千代子編『フランスと日本：遠くて近い二つの国』、早美出版社、(2015)、総ページ数 306 頁、分担部分 61-71 頁。
- ④ 塘 利枝子、東アジアと欧州の教科書に描かれた「いい子」像、安藤寿康・鹿毛雅治編『新：教育心理学』、慶應義塾大学通信教育部、(2013)、総ページ数 349 頁、分担執筆 273-276 頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

塘 利枝子 (TOMO RIEKO)

同志社女子大学・現代社会学部・教授
研究者番号：00300335

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

翁麗芳 (Wong, Lee-Fong)

國立台北教育大學・幼兒教育學系・教授

玄正煥(Hyun Jung-Hwan)

Seoul 神學大學・保育學科・教授